

# 支那哲学史の誕生

吉田公平

## はじめに

中国の哲学思想を儒仏道などの宗派に分断させることなく、全体を視野に収めて包括的に叙述する試みがなされるのは、明治時代以後のことである。伊藤東涯に『古今学変』があり、那波魯堂に『学問源流』があるが、取りあげられたのは儒学思想のみである。伊藤東涯にせよ那波魯堂にせよ、儒者の立場でものされたのであるから当然ではある。その上、彼らの自覚においては「学問」は直接的に自らの生き方に関わることであるから、異端邪説を「学問」の範疇に入れることはしない。仏説の累層を加上説を持ち出して形成過程を解き明かした富永仲基の『出定後語』は着眼の獨創性は瞠目すべきであるが、仏教に限定されているし、思想史そのものではない。道教については三教一致心学という形で流入するものの、それ自体として研究されるのは明治時代末期以後であり、ようやく盛んになるのは昭和初期である。(山田利明「露伴と道教」参照。『季刊誌日本思想史』第五十七号。特集「露伴と漢学」所収。二〇〇〇年)。

日本における中国哲学史研究について学説史的に整理した論考に坂出祥伸に「我国に於ける中国哲学研究の回顧と展望(上)―通史を中心に―」(関西大学文学論集第二十六巻第一号。一九七七年一月)。「同(下)」(関西大学文学

論集』第二十六卷第二号。一九七七年二月)。「明治以後『中国哲学史』研究史年表(初稿)」(『関西大学文学論集』第二十五卷第一・二・三・四合併号。一九七五年)がある。また、明治時代以降の中国文学史研究については近年川合康三編『中国の文学史観』(創文社。二〇〇二年二月)が刊行され、その中には和田英信「明治期刊の中国文学史―その背景を中心に―」、竹村則行『支那文学史大綱』と田岡嶺雲、西上勝「人情の探究と小説史の構築―笹川種郎著『支那小説戯曲小史』をめぐる―」が収録されており、とりわけ卷末には「資料編」として「日本で刊行された中国文学史―明治から平成まで―」が百二十五頁に亘って掲載されている。哲学と文学とでは学問の形成史が同じではないが、この中国文学史研究は中国哲学史研究をみる上ではとても参考になる。

なお文学にせよ哲学にせよ、日本に於ける中国学研究が「中国」を冠するのは第二次大戦後の昭和後期になってからであり、戦前は「支那」を用いていた。本稿は戦後期の中国哲学史研究には言及しないので、原文のまま「支那哲学史」の用語を用いる。

中国哲学史の研究そのものについては坂出祥伸氏の研究が行き届いており、大いに参考にさせていただいたが、少しく視点を变えて、行論を進めることにしたい。その視点とは日本人が著した「支那哲学史」と中国人が著した「中国哲学史」との相互交流の実態の一端をみて、中国哲学研究の雁行を紹介することにした。

## 一、日本に於ける「支那哲学史」一覧

初めに日本に於いて刊行された支那哲学史を一覧することにする。その中に、その時期に中国で刊行された中国哲学史及び支那哲学史の叙述様式に密接に関係すると思われる書物、関連事項をも併せて掲載することにした。

- 一八八七年（明治二〇年）井上圓了哲学館創設（東洋大学の前身）。『哲学会雜誌』創刊。
- 一八八八年（明治二年）内田周平『支那哲学（儒学史）』（『哲学館講義録』第二号以下）。
- 一八九四年（明治二七年）東洋哲学会『東洋哲学』創刊（哲学書院）。大正一五年終刊。
- 一八九八年（明治三一年）松本文三郎『支那哲学史』。
- 一九〇〇年（明治三三年）遠藤隆吉『支那哲学史』。藤田豊八『支那倫理史』。
- 一九〇三年（明治三六年）中内義一『支那哲学史』。
- 一九〇三年（明治三六年）大西祝『西欧哲学史』上卷。
- 一九〇四年（明治三七年）大西祝『西欧哲学史』下卷。
- 一九〇四年（明治三七年）遠藤隆吉『支那思想發達史』。
- 一九〇七年（明治四〇年）山路愛山『支那思想史』。
- 一九〇九年（明治四二年）遠藤隆吉『東洋倫理史』。
- 一九一〇年（明治四三年）高瀬武次郎『支那哲学史』。
- 一九一一年（明治四四年）宇野哲人『東洋哲学大綱』。
- 一九一四年（大正三年）宇野哲人『支那哲学史講話』。
- 一九一六年（大正五年）服部宇之吉『東洋倫理綱要』。
- 一九一九年（中華民國八年）胡適『中国哲学史大綱』。
- 一九二三年（中華民國十二年）陸懋德『周秦哲学史』。

- 一九二四年（大正一三年）渡辺秀方『支那哲学史概論』。
- 一九二五年（大正一四年）胡適著、楊祥蔭・内田繁隆共訳『古代支那思想の新研究』（『中国哲学史大綱』の和訳）。
- 一九二七年（昭和二年）井出季和太『胡適の支那哲学』。胡適の学位論文『The Development of the Logical method in Ancient of China』（『先秦名学史』）の和訳。高瀬武次郎の序。胡適の序（一九一七年）。胡適の小引（一九二二年）。例言（昭和二年）。
- 一九二七年（昭和二年）本田成之『支那経学史論』。
- 一九二九年（昭和四年）宇野哲人『支那哲学概論』。
- 一九三一年（中華民國二〇年）馮友蘭『中国哲学史』（第一篇「上古哲学」）。
- 一九三二年（昭和七年）武内義雄「東洋哲学史（支那）」岩波講座五・六。
- 一九三四年（昭和九年）西晋一郎『東洋倫理』。
- 一九三四年（民国三四年）馮友蘭『中国哲学史』。
- 一九三五年（昭和一〇年）高木八尺『支那哲学講話』。
- 一九三六年（昭和一一一）武内義雄『支那思想史』。山口察常『東洋倫理学史概説』。
- 一九三六年（昭和一二一）小島祐馬『支那哲学概説』（支那学入門叢書）。
- 一九三七年（昭和一二二）秋沢修二『東洋哲学史』。
- 一九三八年（昭和一三三）服部宇之吉『新修東洋倫理綱要』。萩原弘『東洋倫理学史』。
- 一九四〇年（昭和一五五）平原北堂『支那思想史』。

- 一九四二年（昭和一六年）『支那思想文学史』（『支那歴史地理大系』一〇所収）。
- 一九四二年（昭和一七年）齊伯守『支那哲学史』。宮島真一『東洋哲学史綱要』。
- 一九四二年（昭和一七年）馮友蘭著柿村峻訳『支那古代哲学史』。
- 一九四三年（昭和一八年）吉田賢抗『支那思想史概説』。
- 一九九五年（平成七年）馮友蘭著柿村俊・吾妻重二訳『中国哲学成立篇』。

## 二、日本の『支那哲学史』と中国の『中国哲学史』

哲学という語彙が用いられるようになったのは西周の『百一新論』（明治七年）に始まる。大学の中に哲学科が整えられると、この「哲学」という語彙が一般化する契機になった。井上圓了は明治一八年度の哲学科の只一人の卒業生であった。その井上圓了が明治二〇年に哲学館を開設した。哲学会が創設されて『哲学会雑誌』（後に『哲学雑誌』に改称）を機関誌として刊行すると、「哲学」は市民権を得ることになる。この哲学という呼称が中国に適用された早い時期のものが、内田周平の『支那哲学（儒学史）』（『哲学館講義録』第二号以下連載）である。その「緒言」で次のようにいう。（原文句読点なし）。

支那哲学ノ中ニ於イテ、其ノ発達ノ時期最モ長クシテ、而カモ其学説ノ深く且ツ大ナル者ハ儒学ナリ。爰ニ儒学ノ歴史ヲ別チテ三大段ト為スコト左ノ如シ。

(一) 古代儒学 周一代ヲ総括ス。名ケテ發明ノ時期ト曰フ。

(二) 中古儒学 漢魏唐ヲ総括ス。名ケテ訓詁ノ時期ト曰フ。

(三) 近世儒学 宋元明ヲ総括ス。名ケテ義理ノ時期ト曰フ。

余ハ右ノ如ク定メ置キ、乃チコノ次序ニ循ヒテ講述セント欲スルナリ。

中国の儒学を漢学の訓詁學・宋学の義理學・清学の考証學に区分する発想は太田錦城の『九経談』卷一に見えるが、それは静態的に分類した区分論である。それに対して内田周平の三期区分論は発展史的に分類した区分論である。この古代・中古（或いは中世）・近世という三期区分論は西洋史の区分論に啓発されたものである。内田周平の『支那哲学（儒学史）』は支那哲学史の嚆矢かも知れないが、あまりにも簡単な叙述に終わっている。それも取りあげられたのは儒学のみであった。

一覧表に掲げた『支那哲学史』の一つ一つについて紹介することは出来ないで、この時期の『支那哲学史』にみられる特徴を著しているのを取りあげていくことにする。

### 中内義一『支那哲学史』一九〇三年（明治三六年）。博文館。久保天随校。

帝国百科全書の一冊である。蟹江義丸の『西洋哲学史』、『倫理学』、姉崎正治の『宗教哲学』などもその一冊であった。蟹江義丸といえば我々は『孔子研究』『日本倫理彙編』などを思い浮かべるが、輸入紹介型研究の時期であったからであろうか、多彩な著作活動をしていることがこの時期の特色である。それは遠藤隆吉にもそのまま当てはまる。（遠藤隆吉については、蝦名賢造著『遠藤隆吉伝―菓園の父、その思想と生涯―』。西田書店。一九八九年一月。及び町田三郎著『明治の漢学者たち』。研文出版。参照）。中内義一の『支那哲学史』の構成は緒論。第一篇古代哲学。

第二篇中古哲学。第三篇近代哲学である。古代、中世或いは中古、近世或いは近代という、歴史叙述の三期区分論が定着したもののようである。内容的に取り立てて特色があるわけではないが、日清戦争の後八年を経過して書かれた所為であるうか、本文の文末に次のようにいう。

之を要するに、現時の支那人は精神の麻痺に悩むものにして、尋常一様の刺激に応じて起つものに非ず。止むを得ずんば、機械的勢力の打撃あるのみ。凡そ眠るものは、必ず覚むと雖も、予は老人が往々病なくして、睡中に長逝するを見たり。支那人は果して真に眠れるものか、未だ驟かに論定し易からざるなり。

清朝が科挙制度を廃止したのは一九〇五年である。旧制打破が一部に胎動は見られるものの、眠れる獅子の清朝中国に対する偽らざる実感を認めたのであろう。

大西祝『西洋哲学史』上下二巻。明治三六・三七年。警醒社書店。

この書は大西博士全集第三巻第四巻として刊行された遺稿集である。その内容は生前に早稲田大学で講義されたものである。古代哲学・中世哲学・近世哲学という三期区分論の様式で叙述された一一〇〇頁の大著である。この『西洋哲学史』に典型的に見られる三期区分論の様式が『支那哲学史』にも適用されるようになる。蟹江義丸が『西洋哲学史』を書き、社会学の草分けといわれる遠藤隆吉が『支那思想発達史』を書き、高木八尺が『支那哲学講話』を書き上げた。専門が極端に分化した現在では例を見ないが、逆に言うと、支那哲学が広い分野の人々の思索の資源として活用されていたことを示しているとも言える。

## 山路愛山『支那思想史附日漢文明異同論』一九〇七年（明治四三年）。金尾文淵堂。

儒仏道とか漢民族とかに限定せず、問題別に主題を設定して発展史的に叙述したところに特色がある。例えば、「支那思想史に於ける蒙古人の功績」とか「天主教の輸入」など。多彩な著述活動をした山路愛山ならではの著述である。その巻末で瞠目に値する発言をしている。

論者若し十八世紀の下半期より西欧に勃発したる史学が一転して聖書学となりしとき、如何に基督教神学に変化を与へたりしかを回想せば、亦以考証学の支那思想史に於ける功績を知ることを得ん。唯支那は現朝に至るも程朱の学を以て宗主とし、朝廷之を令甲に著はし負くものは異學左道と為したる故に、学者の心自由成ること能はず其の活動甚だ鈍かりしのみ。我等は更に他日細かに之を批判せんと欲す。

考証学を聖書学になぞらえて、考証学が進展すると旧態のままにある現今の支那思想が大変化する成果を生む可能性をみている。また、清朝政府が科挙の教学に採用した程朱学が学者の心の自由を束縛した結果、支那思想界が沈滞していることを指弾する。批判的思想史である所に特色がある。

## 高瀬武次郎『支那哲学史』一九一〇年（明治四三年）。文盛堂書店。

全体の構成は、緒論。第一編上世哲学史。第二編中世哲学史。第三編近世哲学史。九四二頁。儒仏道三教を視野に収めた網羅的な紹介をしている、この当時の代表的な支那哲学史といえる。後に馮友蘭の『中国哲学史』、武内義雄



の『支那思想史』が三教を収めるのは彼らの独創的な発想ではなくして、既に通説的に理解されていた様式を踏襲したことが分かる。高瀬武次郎は冒頭の「自序」の文末に於いて次のようにいう。

近年吾国国運隆昌、台湾を取り韓国を併せ優に東洋の盟主と為る、之が国民たる者若し東洋の根本思想を知悉せずんば、恐らくは政治、教育、宗教に於いて適當の施設を為す能わざらん。

高瀬武次郎は同じく文盛堂から『改訂日本之陽明学』『陽明学新論』『老莊哲学』を刊行しており、その他に『王陽明詳伝』『楊墨哲学』『陽明主義の修養』など沢山の著作を著した。最晩年には国策に沿った著作活動を展開するが、その基本姿勢が既にこの「自序」に顕著に現れている。この高瀬武次郎の『支那哲学史』は一九二五年に趙簡坪によって『中国哲学史』三巻として中国語に翻訳されて中国に紹介された。(上海・暨南大学出版社。)

宇野哲人『支那哲学史講話』一九一四年(大正三年)大同館。昭和一八年六十版。

もと『東洋哲学大綱』を補充したものの。三期区分論を襲う。平明に叙述することに意を注いだ、仏教道教については殆ど触れない。そのかわり、「支那の新人の思想」に目配りしたという。殿將は譚嗣同。「凡そ支那哲学の要領は此書に尽きて居ることは、予の敢えて断言して憚らざる所である。」(序)。「支那哲学の研究」はその姉妹編。その他に『二程子の哲学』『支那哲学概論』『支那近世哲学史』があり、さらに「和訳」書多数。

胡適『中国哲学史大綱』一九一九年（民国八年）。北京大学叢書之一。商務印書館。

卷首に蔡元培の序。叙述の範圍は先秦から秦代まで。高瀬武次郎の『支那哲学史』が中国語訳される前に中国人によつて著された最初の「中国哲学史」を冠した著書である。未完成に終わった哲学史であるが中国では広く読まれ、日本でも翻訳された。一覧表参照。

陸懋徳『周秦哲学史』一九二三年（民国十二年）京華印書局。

本書は宇野哲人の『支那哲学史講話』と胡適の『中国哲学史大綱』に不満を覚えて著されたものである。本書の執筆意図は次に掲げるその序文に開示されている。

叙曰。余昔読日人宇野哲人支那哲学史講話（日本大正十三年出版）。未嘗不喜其簡明。而病其缺略。蓋宇野氏取吾国上下古今之学説。而納之于一小冊。宜其不能詳也。胡適中国哲学史大綱（上册民国八年出版）。取材較廣。立論較嚴。然其書除墨學名学外。於道家儒家法家之説。又「撰焉而不精語焉而不詳」之病。蓋胡氏初治墨家之學。而其哲学史又「由中国名学史底稿改成」。（胡氏自言如此中国名学史即胡氏在美国畢業所作之論文）。故其書詳于名理。而略于他事。余謂古代哲学内。墨家最為淺薄。名学亦多不適用。而其精深之處。反在道家儒家法家之道德政治学説。余既治道家儒家之言。又在美國習法政。因欲別為一書。以明古代道德政治学説之精。而數年以來。往來京濟。經理古玩之業。未暇有所著作也。民國十一年。應北京精華學校之聘。演講周秦哲学史。踰年次其積稿。凡十一章。都為一編。昔英相客倫威爾囑畫師曰。「畫我勿失真相」。夫古代哲学家之去今遠矣。欲求其真相。其必求其平。至於胡氏書錯誤之處。亦略為糾正。若夫見仁見智。則在覽者自得。無庸余之繁詞詳説為矣。民國十二年

六月十日。陸懋徳自記於北京精華學校。

渡辺秀方『支那哲学史概論』一九二四年（大正十三年）早稲田大学出版部。

全体の構成は、序論。上世哲学。中世哲学。近世哲学（殿將は譚嗣同）。その序文に於いて次のようにいう。

由来支那思想を系統的に基礎づけたものは、日欧の学者であるが、然し従来の研究は尚ほ皮相的にして、殊に史料の選択と、先秦諸子の学的根拠を把握する上に、欠如せる点があるのである。此等の点を充実せんと試みたのが、則ち民国の新人、梁啓超・胡適の諸子であり、其思想上に及ぼしたる功績は著大である。併しながら、民国学者の説は、一般に主観的であり、異説を樹つるに急なるは、之が妥当を欠く所以であると思ふ。

梁啓超には『中国哲学史』の著書はないが、『中国近三百年學術史』を初めとする哲学思想史に関する著書は数多くあり、胡適の著書同様に広く読まれたので、この指摘になったのである。その上で欠点を指摘していることは興味深い。ここで渡辺が「日欧の学者」という時の「欧の学者」とは具体的には誰のことをいうのかを知らない。この渡辺秀方の『支那哲学史概論』が中国語訳されて読まれた。胡適著『中国哲学史大綱』の十五版（一九三〇年・民国一九年）の広告に『中国哲学史概論』日本渡辺秀方著劉侃元訳」とある。『中国哲学史』鐘泰著。『中国哲学史大綱』胡適著と併せての広告である。渡辺秀方の『中国哲学史概論』については、次のような宣伝文をつけている。

本書詳論中国哲学自古以迄清季。關於上世哲学。多取先秦諸子的言論。自相互證。中世哲学則以當時神秘的

時代思潮為背景。而取分析的記述法。近世哲学則詳於宋人的理性学與清人的考証学。全書材料豊富。叙述明晰。於中外学者聚訟未決的問題。多取持平之論。訳文亦甚忠実暢達。以近年中国哲学全史之欠乏。読者對於此書。当必有先觀為快之感。

いかにも宣伝の文章であるが『支那哲学史概論』が歓迎された理由が那邊にあつたかを如実に物語る証言ではある。

### 三、馮友蘭の『中国哲学史』と武内義雄の『支那思想史』

渡辺秀方の『支那哲学史概論』が中国語訳されて出版された翌年である一九三二年（民国二〇年）に馮友蘭の『中国哲学史』第一篇が上海神州国光社から清華大学叢書の一冊として刊行された。目次には「第一篇 上古哲学」とある。「第二篇 經学時代」と併せて『中国哲学史』として上海商務印書館から刊行されたのは、一九三四年（民国二三年）のことである。中国人学者の手になる『中国哲学史』の集大成といつても過言ではない。西洋哲学史を模倣した三期区分論を脱して子學時代・經学時代の二期区分論を採用していることも興味深い。近代中国に於ける中国哲学史理解に決定的な影響を持った著書なので、その全体構成を見るために次に章立てを紹介することにする。

#### 第一篇。子学時代。

##### 第一章緒論。

##### 第二章汎論子学時代。

#### 第三章孔子以前及其同時之宗教的哲学思想。

#### 第四章孔子及儒家之初起。

第五章墨子及前期墨家。

第六章孟子及儒家中之孟学。

第七章戰国期之「百家之学」。

第八章老子及道家中之老学。

第九章惠施・公孫龍及其他辯者。

第十章莊子及道家中之莊学。

第十一章墨經及後期墨家。

第十二章荀子及儒家中之荀学。

第十三章韓非及其他法家。

第十四章秦漢之際之儒家。

第十五章易傳及淮南鴻烈解。

第十六章儒家之六藝論及儒家之独尊。

第二篇。經学時代。

第一章汎論經学時代。

第二章董仲舒與今文經学。

第三章兩漢之際讖緯及象数之学。

第四章古文經学與揚雄王充。

第五章南北朝之玄学上。

第六章南北朝之玄学下。

第七章南北朝之仏教及当时人對於仏学之諍論。

第八章隋唐之仏学上。

第九章隋唐之仏学下。

第十章道学之初興及道学中「二氏」之成分。

第十一章周濂溪邵康節。

第十二章張横渠及二程。

第十三章朱子。

第十四章陸象山王陽明及明代心学。

第十五章清代道学之継統。

第十六章清代之今文經学。

馮友蘭のこの章立ては馮友蘭の工夫ではあるものの、日本人の『支那哲学史』の成果の上に考案されたものと考え  
て大過ない。既存の『支那哲学史』との詳細な比較表をここで紹介する紙幅はないが、馮友蘭が「緒論」の中で高瀬

武次郎の『支那哲学史』を批判していることから馮友蘭が高瀬武次郎の『支那哲学史』を中国語訳で読破していたことには疑問の余地はない。

また、馮友蘭が「自序」において顧頡剛の『古史辯』を取りあげていることが象徴するように、疑古史観に立脚した哲学史であるところに特色がある。なお、この問題については、中島隆藏氏に「近代中国における『学問』の自覚」(『東北大学日本文化研究所研究報告』第二八集。一九九二年三月。東北大学日本文化研究施設。)がある。馮友蘭の『三松堂自序』を経線にして、胡適の『中国哲学史大綱』、梁啓超の「評胡適之中国哲学史大綱」等、顧頡剛の『古史辯』を緯線に織りなして、「学問」に対する自覚内容を解析している。示唆に富む論文である。

馮友蘭の『中国哲学史』の特色の一つは、第一章の「緒論」にある。次に述べる武内義雄の『支那思想史』には、この「緒論」に相当する叙述がない。「哲学史」と「思想史」の違いなのであろうか。武内義雄が「思想史」として理由について特に明言はしていないのだが、その「はしがき」の中で「維新以後この種の著作は数種出て居るが、それらの多くは学者の伝記と著書の解題とに詳かで思想推移の跡をたどるに不便であるかの感じがする。私は此書に於て特に思想変遷の過程を明かにしたいと考へた結果、成るべく伝記と解題とを簡単にすると共に、従来此種著作の圏外においてゐた経学の変遷と仏教の影響とに説き及んでみた。」という。確かに高瀬武次郎の『支那哲学史』は武内の指摘するとおり「経学の変遷」を等閑視している。「仏教思想の状況」に言及はしていても「仏教の影響」を叙述するまでには至っていない。「経学の変遷」については武内義雄の師である狩野直喜が京都大学で詳細に講義していたが、それが『中国哲学史』(岩波書店)として刊行されたのは昭和二八年(一九五三年)であった。

馮友蘭が「緒論」において開示した十二項目を次に示して、馮友蘭の問題意識を確認することにした。 (一) 哲学之内容。(二) 哲学之方法。(三) 哲学中論證之重要。(四) 哲学與中国之義理之学。(特に次のように「所謂中

国哲学者、即中国之某種學問或某種學問之某部分之可以西洋所謂哲學者名之者也。所謂哲學家、即中国某種學者。可以西洋所謂哲學家名之也。」。当てはめ論を鋭く批判している。(一五) 中国哲学之弱点及其所以。(論証と説明が劣る。知識を尊重しない。体系的でない。非我の客観世界に認識論が欠如している。論理的でない。宇宙論が簡略。陸懋徳の『周秦哲学史』の非組織性を弁護する立論を非難している。(一六) 哲学之統一(体系性のこと)。(一七) 哲学與哲學家。(一八) 歴史與哲学史。(一九) 歴史與写的歴史。(一〇) 叙述式的哲学史與選録式的哲学史。(一一) 歴史是進歩的(隨落史觀・循環史觀を取らない)。(一二) 中国哲学史取材之標準(高瀬武次郎『支那哲学史』の資料処理が非哲学的であると非難している)。

一々について解説する準備を持たないが、これだけの目配りをして「中国哲学史」が叙述されたのは始めてのことであり、斯界で歓迎されたのは十分に理由のあることであつた。

馮友蘭の『中国哲学史』は「緒論」の準備と二期区分論に斬新さがみられるのだが、全体構成の中に取り込まれた哲学者・哲学思想は、既存の著書の成果が生かされた形になっている。本書の本領は「緒論」に開示された問題意識に基づいて個々の哲学思想が解説されているところにあるといえる。

馮友蘭の『中国哲学史』は「第一篇子學時代」の部分が二度翻訳されている(富山房)。

馮友蘭の『中国哲学史』第一篇「上古哲学」が刊行されたその翌年、一九三二年に、武内義雄の「東洋哲学史(支那)」(岩波講座『哲学』)が上梓された。馮友蘭が「第二篇經学時代」と併せて『中国哲学史』を刊行したその翌翌年、一九三四年に武内義雄は「東洋哲学(支那)」を修正増補して『支那思想史』を上梓した。武内義雄は「はしがき」で「本書はかつて岩波書店刊行の岩波講座『哲学』のために支那哲学史として寄稿したものを、同書店のすすめに従つて修正増補したものである。……最近民国馮友蘭君の中国哲学史を披いて見ると著者の態度と似たものがあつ

て異邦に知己を得た感じがした。」という。この一文はそのまま受けとめるのが妥当のようである。馮友蘭・武内義雄の両者は直接の影響関係はなしに、それぞれが独自に『中国哲学史』『支那思想史』を整理し叙述したものと理解したい。時代区分論を別にと構成上に類似点が見られるのは、両者が利用した既存の研究成果が促したと考えるのが無理のない理解ではあるまいか。明治期以後に著された「支那思想史」「支那哲学史」は、武内義雄をして「維新以後この種の著作は数種出て居るが」といわしめているが、戦後の読書界で読者の支持を得たのは武内義雄の『支那思想史』だけであった。その意味では武内義雄の『支那思想史』は維新以後の「支那思想史」「支那哲学史」の一つの決算ともいえる。馮友蘭と比較する便宜のためにも、参考までに『支那思想史』の章立てを紹介することにした。

## 目次。序説。

### 上世期（上） 諸子時代。

#### 第一章支那古代の民俗信仰。

#### 第三章孔門の二学派。

#### 第五章老子と其後学。

#### 第七章莊周と其後学。

#### 第九章荀子と其門下。

### 上世期（下） 經学時代。

#### 第十一章前漢の經学。

#### 第二章孔子。

#### 第四章墨子と其後学。

#### 第六章稷下の学。

#### 第八章論理学の發達。

#### 第十章周秦代の思想界。

#### 第十二章後漢の經学。



第十三章 兩漢の諸子。

中世期 三教交渉の時代。

第十四章 儒教より老莊へ。

第十六章 道教の成立。

第十八章 隋唐の仏教。

近世期 儒教革新の時代。

第二十章 儒学の新傾向。

第二十二章 宋学の勃興。

第二十四章 春秋学—歐陽修と司馬光。

第二十六章 宋学と仏教。

第二十八章 朱陸の門葉。

第三十章 清学の推移。

第十五章 老莊より仏教へ。

第十七章 經学の統一。

第十九章 中世期哲学の概観。

第二十一章 仏教の新傾向。

第二十三章 道学—周張二程の学。

第二十五章 宋学の大成—朱子。

第二十七章 宋学の別派—陸子。

第二十九章 明学—陳白沙と王陽明。

「支那古代の民俗信仰」については先行する「支那哲学史」・「支那思想史」に説き及んでいるものがあるものの、顧頡剛の『古史辨』の影響であろうか。「諸子学」「經学」に精通していた著者の本領が上世期・中世期に發揮されている反面、著者も「はしがき」で告白するとおり、「仏教」「近世期」については「未熟」を自認している。小冊子にまとめられた「簡史」であるから個々の立論について今日の視点から問題を指摘することは困難ではないが、本書が果たした功績は大きいものがあつたといわざるを得ない。

武内義雄は『支那思想史』を次の一文で終わっている。武内の「支那思想史」理解の根底を象徴する発言なので長文を厭わずに掲載することにする。

之を要するに清朝はその初めに於て朱子学を以て国家教育の根本としたが、その後考証学の栄えた結果朱子学の基礎が揺るぎ出して、朱子学者は新研究を取つてその改修工作に移つたがその目的を果たしえず、公羊学派が之に代わらうとしたが之も失敗して何等の精真もえられなかつた。かくの如く清朝思想界の末路は惨憺たるものであつたが、その考証学の精緻なことは前後無比といふべく、これによつて吾々は既に湮滅した両漢の思想を髣髴することができるようになつた。さうして文字音韻の研究が進んだため更に遡つて先秦の古典も正確によみ得る様に成つた。これらの功績は実に偉大なもので、吾々は周代から清末に至までの思想変遷の跡をたどり得るやうに成つたのもこれらの研究の成果にまつものが多い。従つて吾人の清朝の学者から学び得たところはその研究だけで、思想内容として特筆すべきものを見出し得ない。支那近世期に於ける思想家は何といつても朱子と陽明とが代表的の学者で、それ以後は殆ど發達してゐないものといつてよい。

#### 四、おわりに

武内義雄の『支那思想史』が刊行された昭和十一年に弘文堂から「支那学入門叢書」が刊行された。小島祐馬の『支那哲学概説』、岡崎文夫の『支那史概説』、青木正児の『支那文学概説』の三点セットが刊行された。国家総動員体制に傾斜していく時代の中で、近代日本に於ける支那学が第二世代によつて面貌一新する気運が醸成されつつあつた時

代であるとも言えようが、時局がその成長を許さずに、戦後を迎えることになる。

戦後の「支那学」の特徴は「支那文学」が韻文学・古典小説の研究に新境地を開拓して「中国文学」として蘇生したのに対して、「支那哲学」はその内容が封建思想であること、国家主義体制に荷担した反動思想であるという烙印を押されて、哲学として語ることに自信を失い、歴史主義の嵐の中、性急に政治思想史の中に位置づけられることに甘んじた。哲学することを忘れさせられたのである。(このことについては大まかな見取り図を画いたことがある。「真理の言葉・資源としての中国哲学」『サティア』四一号。東洋大学井上圓了記念学術センター刊)。武内義雄の『支那思想史』は戦後に『中国思想史』として再刊されると、政治思想史を急ぐものは武内説を重宝した。その反面、「支那哲学史」が『中国思想史』として再刊されることはなかった。新たに「中国哲学史」を著すものもいたが、新たに哲学した形跡は見られない。その中であつて西順蔵の諸論考が収められている『中国思想論集』と荒木見悟の『仏教と儒教』が哲学的研究の成果といえよう。

古典学の手法を踏まえた上で、改めて哲学することを「中国哲学」の研究者が試みるのが無意味とは思えない。そのことを試みることによつて二〇世紀の所謂新儒家の遺産を理解し評価することが可能になるのではないだろうか。「支那哲学史」の誕生を『支那哲学史』『中国哲学史』を追跡することによつて垣間見てきた。そこでは日本の「支那哲学史」と中国の「中国哲学史」が相互に浸透しながら展開していることを確認したわけだが、「支那哲学史」は誕生していたものの、「支那哲学」は哲学として誕生していたのであろうか。馮友蘭が中国哲学のあれこれを西歐哲学のあれこれに当てはめることを批判していたが、そのような研究は哲学の研究とはいえない。改めて考えてみることにしたい。